「我輩は猫である」における漱石の展開

――「第一」から「第三」までを中心に――

文室温晴

一

漱石の人となりを見ていく場合、いくつかの視点がなりたつが、教育者としての漱石をながめてみた時、そこに三つの性格を見出すことができる。

一つは、教壇に立つ漱石である。彼は東京専門学校・東京高師・松山中学・五高・東京帝大・明大で、この立場にあった。

二つめは、「教育者の家」の主人としての漱石である。べつに、彼自身、意識的に造ろうとしたものでなく、まして、その場で「教育」してやろうとはじめから構えていたものではなかったが、寅彦との出会いに始まるこの場において、彼は、その弟子達に多くの影響を与え、その結果、日本文学史の中に漱石山脈を作り得た。

三つめは、教育に強い関心を示した作家としての漱石である。彼の作家としての活動の中に、武者小路実篤が予言したような「国民の教育者」的性格が強くぬり込められていることは、否定できない。

この三つの性格は、漱石という主体の中で、それぞれ独自の位置を占めているが、それが、独自の世界として分離していく過程において、「我輩は猫である」を創作していた時には、微妙な形で三者が結びついていることに気づくのである。

「猫」がなかったら、という仮定は、漱石を考えていく場合、ほとんど意味をなさない。明治二十二年、二十三才の時、子規を知り、一高校長後援の、国家主義の学生結社に入会を拒否し、「（ももとせの後）軒端ちかくゐよりて行末を思ひ昔を忍ぶことわれに似たる人もあるべしさてもおかしきは浮世なりけり」注(1)と述懐した時には、すでに漱石文学の原形は動きはじめていたと言えるし、明治四十三年、戸川秋骨が「早く既に今日の地位にならねばならぬ筈の人が、『猫』を発表するまで遅れて居たのだ」注(2)と評しているのも、十分に理解できるのである。

しかし、「猫」による、読書の歓迎がなかったならばと、いう仮定は、漱石を考えていく場合、十分に成り立つ。当時の彼に「猫」

をあのような形にまで書かせたものは、読者の歓迎に、そのほとんどを負っているといって、過言ではない。彼を、おくればせながら作家の道に踏み込ませたのは、読者であったとも言える。

「猫」による漱石の展開は、巨視的には、作家への出発点として位置づけられようが、微視的にみると、「猫」自体の中で、小きざみに、内容・方法が展開している事実も、見落せないものがある。

この稿では、教育者としての漱石の、三つの性格にからませながら、「猫」における「第一」から「第三」までの展開をたどってみようと思う。

「猫」全般を通して、彼の取った方法は、夏目鏡子が「事件や人物は大概見当がつくのが多いやうです」注(3)と評するにふさわしいものであった。

小宮豊隆は「夏目漱石」の中で、「第一」と「第二」以下との、「著しい感じの相違」を指摘し、「第一」は「何か慎ましやかで、をどをどしたもの」を持ち、その原因として、虚子が手を加えたことをあげている。そして、「『猫』らしさを発揮するのは、『猫』第一そのものであるよりも、第二、第三以下」であるとしている。

また、その中で高浜虚子の「漱石と私」を引用して、「氏（漱石）は大分不平らしかったけれども、未だ文章に就いて確かな自信がなく寧ろ私を以って作文の上には一日の長あるものとして居ったので大概私の指摘したところは抹殺したり、書き改めたりした」ことを紹介する。

このことは、事実であろう。が、「大分不平」でありながら、虚子の力を認めて、ほとんど虚子のなすがまま、それを「ホトトギス」に発表した漱石、しかも、それが彼の処女作になったという、特異なケースに注目したい。

小宮は、その間の事情を、「『ホトトギス』は俳句の雑誌として、文壇とは殆んど交渉のない雑誌であった。その意味で漱石の『猫』は、そのすべてに於いて、既成文壇を無視して書かれた作品だったのである」注(4)と説明する。その「猫」が、結果的には、漱石文学を生むきっかけになった。漱石の手になったものは、類のない姿で存在しているのに、その下書きが残されなかったという事実は、「猫第一」の真空状態を暗示しているように思われる。

注(1)対月有感　岩波新書版「漱石全集」二十二巻所収　二三六ペ
(以下「全集」と約す)
(2)夏目漱石論　現代文学論大系(6)所収　三〇〇ペ
(3)漱石の思ひ出　角川文庫版前篇　一三八ペ
(4)漱石の芸術　五ペ

二

「猫」は、もともと山会のための習作としてつくられた。しかし、いくらうちわの会のためのものであれ、当時の彼の年令と社会的地位から考えて、「猫」のような作品を発表するには、相当の抵抗があったと考えるのが普通だと思われる。にもかかわらず「猫」が作られたということは、作者である漱石の特殊性と、それを受け入れた山会の特殊性とが、助けあって生み出されたとしなければならない。

漱石と山会との関係の源流は、山会が、子規の文章論をたずねる

ために持たれた会である関係上、彼と、子規との出会いに始まるといえる。彼と子規との間に通わされた書簡を見れば、強く引きあう人間関係の上にたって、時ごとに、子規の言葉によって触発された、漱石の、文学に関する思索が読みとれる。彼が山会に参加していたのも、子規との出会いにそのほとんどを負っていたのである。その機関誌に対しても、子規との連なりから、気楽な発表機関と考えられていたようだ。「ホトトギス」に対する、彼の投稿原稿を見ると、「倫敦消息」「自転車日記」それにいくつかの俳体詩などで、この系列の中に、「猫」ははいっている。

一方、彼の創作時期を考えてみると、「自転車日記」以後発表をやめていた「ホトトギス」に対し、三十七年十月から、俳体詩や連句の投稿をはじめ、十一月・十二月・一月・三月と続いて発表されている。また、その投稿をささえていたものとして、七月頃から、かなりの俳体詩が作られたものと思われ、その一部は、書簡によって、虚子・真綱に送られている。

明治三十七年、六月から七月にかけての漱石の書簡をたどってみると、それまでの彼には見られなかった、ある事実に気づく。その一つは、六月三日には一通、四日には戯画をかいた二通の葉書を、野村伝四にたてつづけに送り、さかんに気焔をあげていることである。二つめは、七月二十日、野間あてに、次のような手紙を送っている事があげられる。

俣野大観先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寝転んで話しをして居ても小言を言はれないと僕の家にて寝転ぶもの曰く俣野大観曰野村伝四半転びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁危坐するもの曰く野間真綱曰く野老山長角

東京をはなれ、松山に都落ちしてからの漱石をみると、行った先々で、強く求め、結ばれた仲間をつくっていることに気づく。松山の子規・熊本の菅・英国の池田・がその例にあげられる。

三十六年六月十四日、中国にいる菅虎雄に対し、「君ガ居ナクナッテ悪口を闘ハス相手が居ナクナッテ甚ダ無聊ヲ感ズルヨ」とこぼし、七月三日には「君ヲ失ッテ悪口の相手ガ居ナクナッテ甚ダ寂寥ノ至ニ堪ヘン僕モ支那ヘ行キタイヨ」とかいっていることとくらべあわせると、三十七年六、七月は、「悪口」仲間にとってかわるに十分な、新らしい、ピチピチした仲間の誕生を暗示している。漱石は、自からも「他が造って呉れたやうなもの」注(1)と回顧するとおり、いつも人に触発されて、自分を築いていく人であった。そのことを考えれば、この新しい仲間達は、漱石が新しい活動を始めていくのに、なくてはならないものであったろうと思われる。

漱石は、三十七年五月、「帝国文学」に「従軍行」を発表している。「帝国文学」は、彼にとって、「ホトトギス」と同じく、うちわのものであるはずであるが、背景が背景だけに、「ホトトギス」のような気安さはなかったと考えるのが妥当ではあるまいか。

六月三日、野村伝四に送った手紙の中で、「太陽にある大塚夫人の戦争の新體詩を見よ（中略）女のくせによせばいゝのに、それを思ふと従軍行抔はうまいものだ。行春や重たき琵琶の抱心とは蕪村の秀句に候。」といったかと思うと、一方では自分のノートに「何でも腹の減って居る時の句に相違ない」「（いやに傲慢な人を馬鹿にする男が）自分で自分の悪口をいって其悪口が当って居るので人に褒められて喜んで居る世は様々のものさ夫から見る〔と〕君の新體詩の方が下手といふ丈だからまだ罪がない」注(2)と、自評ともつ

かないことを書いている。「僕は新體詩を作ったから見てくれ給へ」に始まるこのノートには、漱石流の不安を、自ら慰めようとしている姿が読みとれる。

なお、野村に対する手紙についてつけくわえれば、漱石が自分の作品についてこのようなことをいったのは、手紙に関する限り、三十六年七月三日、「自転車日記」について、「甚ダ上品ナラザル文章ダガ中々ウマイヨ」と菅宛に書いて以来のことである。漱石という人は、こと創作に関するかぎり、一言はこういうことを誰かに話しかけずにはいられなかった人らしい。そして、「自転車日記」については菅にいわれたものが、「従軍行」では野村に対していわれていることが、注目されるのである。

さて、三十七年十月には、虚子と合作で「尼」という俳体詩を発表している。このことによって、当時の虚子と漱石との関係が、かなり親密であったことが知れる。

三十八年一月、漱石は、「猫」と「童謡」を「ホトトギス」に、「倫敦塔」を「帝国文学」に、「カーライル博物館」を「学鐙」に発表した。そして、「猫」は、「倫敦塔」よりも早く世に出、人々の注目をより多く集めえたということにより、彼の処女作となりえた。その「猫」が、虚子によるかなりの修正をうけたことは、世に知られているとおりである。漱石の意識からすれば、「山会」のために修正を許したはずのものが、そのまま活字になってしまったという程度のものではなかったろうか。

一方、「倫敦塔」の方は、創作中、野間を相手に、「大文学者になるつもりだ」注(3)と出たかと思うと、脱稿した後には、「面白くもなんともない」注(4)と前言を取り消したりして、その間に、微妙な振幅を見せている。このような振動は、「猫」には見られないものであり、「倫敦塔」によって「大文学者」になろうという意識は、額面通りは受け取れないにしても、「倫敦塔」において、このような言葉が飛び出してきたことは、注目しなければならない。彼は、初めから、「倫敦塔」を「帝国文学」に出すつもりで書いたのであろう。とすれば、「倫敦塔」のような作品を書きながら、かって高山樗牛が作家生活に飛び込む以前、「帝国文学」を足がかりにして活躍していたことを、漱石が一度も思い浮べなかったということは、ありえないことと思われるのである。しかし、結果的には、「猫」の方が好評だった。少なくとも、より近くの人々が、それをはやしたてた。

正宗白鳥の「作家論」の中には、次のような回想がある。

私は、「猫」のまだ世に現はれない以前、漱石がまだ無名作家であった時分、彼に関する短評を、読売新聞に掲げたことがあった。それは「源兵衛村から誰とかゞ大根を持って来た」といふやうな剽軽な俳体詩を、「ホトトギス」誌上で読んで感心したためであった。

白鳥が新聞に書いた短評とは、明治三十八年一月二十日から二十四日まで、「漱石と柳村」という題で載せられたものをさしている。「源兵衛村から誰とかゞ」云々の部分は、「童謡」のことをさしているのだが、その「童謡」は、「猫第一」と同時に発表されたのであるから、「『猫』のまだ世に現はれない以前」という白鳥の回想は、事実と合わないことになる。

一方、「漱石と柳村(マヽ)」を読んでみると、「其の日常の生活はホトトギス誌上の『我は猫である』といふ一文によりても、一斑を窺ひ

得べく」云々とあり、それによって、白鳥がその頃「猫第一」に目を通していたことが知られ、彼の回想の誤りを指摘することができる。

白鳥の、この二つの筆の間には、二十三年の隔りがあり、それを単に記憶の誤りであるとしてさしつかえないものではあるけれども、後年の作品である「作家論」の中で、暗黙のうちに「猫」を漱石の処女作として認めている割には、「漱石と柳村」の頃、「猫第一」を処女作の名にふさわしいものとして読みとっていなかったということは、十分に言いうるのである。

「猫第一」の空白は、単に漱石の側にのみあったのではなかった。そして、白鳥の「漱石と柳村」を漱石が読んだ時には、もう、「続篇」は脱稿し、すでに虚子の手に渡っていた。

注(1)処女作追懐談　全集三十四巻　一六六ぺ
(2)漱石の断片　全集二十四巻　九〇ぺ
(3)十二月十九日付　全集二十七巻　二一九ぺ
(4)十二月二十二日付　全集二十七巻　二一九ぺ
なお、「作家論」は新潮文庫版より、「漱石と柳村」は、講談社版日本現代文学全集「正宗白鳥集」より引用した。

三

「猫第一」は、虚子の勧めによって書かれ、虚子の手を経て、山会に発表され、「ホトトギス」に掲載された。この場合、虚子の手を経たといっても、虚子はもっぱら「贅文句」を取るという方法を用いたのであって、その構成にまでは及ばなかったと判断していい。「第一」の特徴は、「第一」とつけられたのは後のことで、当時の彼は、これだけで終るつもりだったという創作意識に負う所が多い。「第一」に関するかぎり、漱石は、読者が、主人イコール漱石と判断するだろうという予想のもとに書き、猫自体には、その観察者という立場を取らせている。

「第一」とは、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」に始まり、「吾輩は猫ながら時々考へることがある。教師といふものは実に楽なものだ。」とうそぶくや、「夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないそうで」と断わり、「吾輩が此家へ住み込んだ当時は、主人以外のものには甚だ不人望であった。」と、誰が読んでも、そこまでは、漱石すなわち主人と想像しそうな、猫と主人との関係を明らかにして、他の人間を排している。

「第一」の書き出しにおける、この姿勢は、漱石と「猫」との関係を考えていく場合、大切にしなければならない。

〃吾輩は人間と同居して、彼等を観察すればする程、彼等は我侭なものだと断言せざるを得なかった。〃

このような人間批評は、当時の漱石の生活を知れば、当然生れ出るはずのものであった。彼は、私生活において、このような断言を、いろいろな形で、くり返しせざるをえなかった。

〃予の周囲のもの悉く皆狂人なり。それがため予もまた狂人の真似をせざるべからず。〃注(1)

ある時は、一人書斎にとじこもって、机上の紙に、こんなことを書いていたという。漱石を正気の基準にして、ずばりといってのけたこの真実も、いい切ってしまった後の安らかさを期待してのものではなかった。以前、「『ドメスチックハッピ子ス』注(2)杯いふ言

は度外に付」すとうそぶいていた彼は、思わぬ因果に、さんざん苦しまされねばならなかった。「帰朝後の余も依然として神経衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認する」注(3)ような状態に追い込まれた彼は「彼自身はそれを自分の性質だと信じ」る注(4)ことによって、みづからをささえた。

留学によって彼が生みだした、もしくは生み出そうとした音楽は、彼の周囲の者にとっては、狂人の音楽にすぎなかった。少なくとも彼自身は、そう解釈した。そんな彼が取りうる道は二つ。自己の音楽を、狂人の音楽として戯画化して世に消化さすか、ひとりそれを楽しむかである。漱石は、「猫」を書きつづけることによって、この二つを同時になしとげることができた。

強靱な知性が、精神的にも、肉体的にも痛めつけられた主体に宿るとき、異常な鋭さをもって現実のかせをつき壊すことがある。そのころの彼が、うつつともおぼしき幻覚になやまされたであろうことは、想像に難くない。また、自己を閉鎖しきったなかで、傲慢と謙虚の間を、激しく往復する精神状態ほど、弱々しいものはない。その弱々しいものと、幻覚とを、彼の、さらに強靱な、自己を観察し通そうとする力が、作品の中に定着させていった。

〃「昨夜は僕が水彩畫をかいて到底物にならんと思って、そこらに抛って置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。偖額になった所を見ると我ながら急に上手になった。非常に嬉しい。是なら立派なものだと独りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覚めて矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になって仕舞った。」

主人は夢の裡迄水彩画の未練を背負ってあるいて居ると見える。〃

この夢は、彼が実際に見たものであろう。さもなくば、彼自身も意識できない、もっと深い所から彼に吐かせた本音ではなかったか。彼の現実から、何か明かるいものを見出すためには、「そこらに抛って置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて呉れ」ることが、いちばん彼に負担のない方法なのである。幸運にも、「主人の夢」は正夢になった。「猫第一」は「抛って置いた」ものであった。彼を取りまく人々は、それを「立派な額」にして欄間にかけた。そして、漱石が「猫」を続けるにしたがって、「欄間」にかける人は増していった。

いっぽう、「第一」のころの漱石は、自分の「教師」という職業をどのように見ていただろうか。

「第一」では、主人を紹介するにあたって、「職業は教師ださうだ」「教師といふものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。」「夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が来る度に何とかゝんとか不平を鳴らして居る。」といい、「第一」の終りの部分では、「人が来ると、教師が厭だ〳〵といふ」で文を閉じかける。教師に対する否定的批評の数は多いにしても、「猫」全体を通して、教師はいやだという言葉が素直に出て来たのは、この二ヶ所だけで、あとは「第四」と「第五」に苦沙弥の言葉として、会話に折り込ませて、それぞれ一ヶ所ずつあるのみである。在職中の漱石の教師観の根底には「学識狹薄なる無能漢すら亦教員を以て高尚なる職業と思はず況んや大学を卒業して学士の肩書を有する者をや」注(5)という見方があるいっぽう、教

育そのものに対しては、「余は現に或る地方に遊んで其所の少年気風卑野なるを見始めて大学の有り難さを知れり」注(6)といい、彼が受けてきたものに関するかぎり、全面的な信頼をよせている。

大正三年、学習院における講演の中で、彼は教師時代をふり返り、「幸に語学の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に済んでゐましたが、腹の中は常に空虚でした。」といっている。その空虚な腹をかかえて、彼がどんなに忠実に自分の義務をはたしたかは、すでにいくつかの回想で述べられているところである。

英国から帰ってきた後は、東京帝大の講師になったため、「文学論」を中心にすえて勉強を続けるつもりだった彼は、講義を中心にして「文学論」をまとめていかねばならなくなった。「道草九」のはじめに、「活力の大部分を挙げて自分の職業に使ふ事が出来た」というところの職業とは、同じく「二十一」で「健三の新に求めた余分の仕事（明大の仕事をさす）は、彼の学問なり教育なりに取って、さして困難のものではなかった。ただ彼はそれに費やす時間と努力を厭った。」とあることにより、時間と努力をかたむけたもの、すなわち教育、ではなくて、「文学論」を中心とした一連の講義のことをさしていることに気づく。彼が「生きてゐるうちに、何か為終せる、又仕終せなければならないと考える男」注(7)である以上、そのころの彼には、教師そのものは、彼のいう「何か」と結びついていなかった故に、空虚を感じていたことに変わりなかったと思われる。「高等師範などを夫程有難く思ってゐなかった」注(8)彼が、中・高校に満足するはずがなく、大学は、いつも「今夜中に片付けなければならない明日の仕事」注(9)である上に、生徒には理解されず、といって漱石が「何か」を「文学論」を中心とした一連のものに置き、英文学を相手取った以上、「生徒ニ得ノ行ク様ナ事ハ教エルノガイヤ」だということになる。同じ菅への手紙に「高校ハスキダ」とあるのも、高校の方が自由な時間が多く持てる上に、学生の渋面を経ずに、英文学を相手どることができるためとも考えられ、帰国後は、「何か」をすべて文学論に、託していたと考えられる。「猫第一」の中で、教師はいやだという声が、隠れたリズムを奏でているのは、以上のようなところからきていると思われるのである。

注(1)漱石の思ひ出　一二二ぺ
(2)明治二十八年十二月十八日付、子規への手紙　全集二十七巻
六六ぺ
(3)文学論序　全集十八巻　一四ぺ
(4)道草二　全集十三巻　九ぺ
(5)中学改良策　全集二十二巻　一一一ぺ
(6)同右　一一三ぺ
(7)道草二十一　全集十二巻　四十九ぺ
(8)私の個人主義　全集二十一巻　一三五ぺ
(9)道草七　全集十三巻　十七ぺ

四

〃吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは有難い〃

「第二」は、こんな書き出しで始まる。しきりに悪口仲間を求めていた彼にとって、「猫」の発想が以外にうけたということは、確かにありがたいことだったろうと思われる。大晦日には、伝四・寅彦・四方太が訪れ、正月には、彼等への招きに忙しく、漱石を守る人々は健在である。虚子は、さっそく続篇を頼み、彼も十五日には書き終えてしまう。「今迄世間から存在を認められなかった主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だ。」といっているのも、素直にうけとるべきであろう。よくよくこの文章を読み返してみると、猫と主人との関係は、「第一」でととのえられていたものを、見事に壊してしまっているのであるが、読者は、「第一」で設定された、主人イコール漱石を了解しているために、主体の逆転も、それほど苦にならない。というよりも、むしろそれを当然のこととして、書き、読んだのであろう。「(主人は)どっちにしたって明治の歴史に関係する程な人物でもない」というような言葉が、人のため、国家のためと思いつめている漱石の素顔そのまゝに、否定のヴェールをかむって出てくるのも興味ぶかい。「第二」が発表されて間もなく、「日本文壇の偉観」と皆川からいわれた時には、まんざらでもなかったであろう。

「第二」にはいると、教師という色彩は主人からほとんど消え去ってしまい、薄氷をふむような猫の恋とともに、寒月・東風・迷亭を登場させて、死への魅惑と、恐怖が、俳諧の手法を通して語られる。

〃昔ー大変な罪悪を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の様に張りつけられて閉口した夢を見た。何でも其罪悪は人殺しか何かした事であった〃注(1)

「第二」の後半は、こんな夢にさいなまれた死への恐怖と憧憬が語られている。夢にまで追ってきた、殺人・自殺の幻覚を、「第二」のような形で作品に定着させ得たのは、漱石における不死身なものの勝利といって過言ではない。その間、倫敦塔の評も上々であった。「第一」の時には、野間に対して「実は作者自身は少々鼻について厭気になって居る所だ」といった彼が、一ケ月後には「みんな何でも蚊でも書いて〳〵世間を圧倒すればいゝ君も何でもいいからやり給へ」とその姿勢を変え、後年の「ただ書きたいから書き、作りたいから作ったまでで」注(2)という回想によって受ける印象ほど超然とはしていなかった。

「第二」を書き終って、漱石が野間に「時間さへあれば僕も稀世の第(ママ)文豪になるのだが。時が乏しいので、ならずに死んで仕舞ふのは残念だか幸福だか一寸自分には分らない」といったころには、まだ文学は余技であり、「職業」として文学論をしっかりと握っていた。

しかし、漱石の知らない所で、野村伝四が「七人」に「猫」を発表しようと虚子に交渉にいった時、虚子は、「猫第三」の広告はすでに出してしまっているからという理由でつっぱねたりする注(3)という事件が起きたりすると、漱石の創作意欲は、微妙な所でくすぐられ、かきたてられていくのである。彼の仲間達は、漱石の思いとは無関係に、せっせと彼を作家への道へひっぱり出していった。もちろん、若い仲間達が漱石の将来を予測していたとはいえない。二人とも、ただ漱石の作品が欲しかったゆえの事件にすぎない。それだけに漱石は、彼等のひたむきなものを敏感に読み取ったであろう。それに追い打ちをかけるように、「ホトトギス」には、派手な百

号広告が出た。三月十四日、彼は野村にあてた手紙の中で、こんなことを言う。

〃巻末の百号広告は少々山師的だね。僕もあの位かつがれゝば沢山だ。尤もあれで人が読んでくれなければ僕の名声も地に墜ちる訳だなあ！

世間は存外静かだのに虚子一人が騒いで僕を吹聴して居る様な気色だハ、、、、〃

漱石の生涯の内で、彼が心から快哉を叫んだ時期の一つに、この頃からの一ケ月をあげなければならない。しかし、この愉快は、文学論の仕事と、両立する性格のものではなかった。

四月二日、「ホトトギス」百号が出るやいなや、漱石は、その時を待ちこがれていたように、野村に「ホトトギス萬歳だ」と書き送っている。もちろん、自己の作品には、もう、十分の自信を持ちうるようになっていた。仲間達というより、一つのサロンと呼ぶにふさわしいまでに成長したこの集いは、漱石の文壇進出とともに開花期を迎える。これは、小宮・草平等の新参者達にとっても、たまらない魅力であったに違いない。

そんな愉快のさなかに、漱石は新学期を迎える。

〃僕は今大学の講義を作って居る。いやでたまらない。学校を辞職したくなった。学校の講義より猫でもかいて居る方がいゝ。

〃注(4)

彼が、帰朝以来、不愉快をかこちながらも、すべての困難とたたかって、ある場合には、家庭の犠牲をも覚悟の上で、守り通してきた文学論の仕事は、今度は、彼自身によって見はなされようとしだした。「猫」を書きつづけるのは楽しい。しかも予想以上の反応がある。手応えがある。文学論の方は、苦労に苦労を重ねても、学生に反応はない。文学論で何かをしおおせようとした漱石の決意は、「猫」の楽しさの前にもろくもくずれ出す。

かって漱石は寅彦に「『猫』を書き出して、やっと先きが明るくなったやうな心持になった。」注(5)といっている。書きたいから書いたと回想している「猫」は、その言葉から想像されるほど超然とした所から生みだされたものではなく、むしろ書きたいことを「猫」の中におし込めていくところから生みだされた。その結果、「猫」における方法は、主人達を猫が観察し、時に猫自身の世界に遊び、その猫を漱石が描きだす。しかも、暗黙の内に主人イコール作者であるという約束事を読者にとりつけるという三重構造に落ちついた。

「猫」は、その内面においても、外界においても、漱石をとりまく仲間達と深いかかわりを持った。その結果、漱石の「異様の熱塊」は、世の人に認められ出した。漱石の明かるさは、ここに見出されたのである。

注(1) 一月十五日付野間真綱への手紙　全集二十七巻　二二五ペ
(2) 處女作追懐談　全集三十四巻　一六六ペ
(3) 二月二十二日付野村宛の手紙による。　全集二十七巻　二三二ペ
(4) 四月七日付大塚保治宛の手紙　全集二十七巻　二三八ペ
(5) 漱石襍記所収　「『猫』が出現するまで」　(小山書店)　四八ペ

（滋賀県立伊香高等学校教諭）